

論文審査結果の要旨

本論文の内容は公開発表会（平成25年5月10日午前10時から12時 文学部会議室）において説明がなされ、質疑が行われた。その際の質疑の主な内容は、以下の通りである。

【序章】

- ①山隣派の意味について、例えば門派との意味の違いは何か。
- ②戦国期に地方展開を達成した宗派としては法華宗や浄土真宗などもあるが、これらの宗派との違いは何か。

【第一章】

- ③本章は、本論全体の論旨から見て孤立化している印象があるが、第二章以下とどのように関係するのか
- ④「宗嶽」らが大応派僧と考えた場合、どの地域から来明した禅僧集団と考えるか。

【第二章】

- ⑤「大徳寺・妙心寺各寺の居成住持の数を比べた場合、大徳寺の方に居成住持の数が少ない傾向がある」と指摘するが、このことからどのような論点が引き出せるか。
- ⑥「南派は地方拠点形成の点において一步遅れていた」・「大徳寺山内に塔頭寺院を複数形成することで大徳寺運営の中心をになっていた」との指摘があるが、これは檀越大友氏・大内氏の中央志向と関係した現象とは考えられないか。
- ⑦「立成は山隣派の入寺システムにおける特色」と指摘するが、そのことの意味は。

【第三章】

- ⑧朝倉氏の真珠庵派保護の理由について、一休への帰依とともに真珠庵派の有する経済的、人的関係を重視しているが、同様な傾向を有すると思われる大徳寺北派との差異をどのように考えるか。

【第四章】

- ⑨龍泉派僧にとって後北条氏の保護は、どのようなメリットがあったか。

以上の質疑に対して、①派祖を核とした僧侶集団である「門派」とは異なり、「山隣派」は教団展開の特色から類型化された概念である。②中央権力と連携しつつ地方へ展開した点である。③山隣派形成の母胎となった大応派禅僧の動向を検討してみた。④おそらく、博多周辺地域からの禅僧であろうと考える。⑤今後の課題であるが、両寺の在地性に関連すると考えている。⑥そのような面から今後さらに検討してみたい。⑦立成(一日住持)の入寺方式が、中央と地方(在地)の両方に軸足をおく点で山隣派の特色に合致すると考えた。⑧⑨については今後の検討課題としたい、との回答があった。

以上の質疑応答の外、個別的に史料読解の誤りや誤字・脱字についても指摘があり、また確認された事実のいくつかについては、さらに踏み込んで考察すべき旨の指摘もあった。しかしながら、本論文は、研究史上、圧倒的に手薄であった分野に果敢に取り組み、今後の研究の手がかりを見いだしている点など、貴重な成果に属する研究であると判断した。よって、本委員会は本論文が博士(歴史学)の学位論文として価値あるものと認める。